



第30号 (年4回発行) 編集発行 前学委員 弘広 印刷所 (有)小野印刷所

はなむけとして



学長 吉岡 利忠

三月二十二日に体育館におい

て卒業式がありました。大学卒業生は文学部三十四回生および社会福祉学部六回生となりま

す。また、大学院では社会福祉学研究所修士課程四回生および大学院文学研究科修士課程二回

本多庸一とキリスト教(7)

学校法人弘前学院

理事長 阿保 邦弘



五、横浜遊学とキリスト教との

出会い

日本宣教の可能性が開かれて来日した宣教師たちは、英語の

められた年限で所定の単位を修得し終えたときに学士あるいは

修士の称号を授与される式典です。この授与式において述べた

式辞を記載します。皆さんはこの弘学時報三十号が届けられることになっております。

先ずは、就職活動についてです。大都市圏あたりでは経済情勢の好転が報道されていますが、地方にとつてはまだまだ

その恩恵に与ることは出来ません。特に青森県の全般的な社会状況は低迷しており、地方行政、経済情勢などのランク付け

では、全国的に見て常に低位に

甘んじている状態です。そのような環境ではありますが、大学では、今回で三度目の就職セミナーを開催いたしました。今年

の卒業生は昨年の就職セミナーに参加し三月現在の就職率は全学部で八割程度ですが、これから期待できそうです。今回の就職セミナーは、特に青森県内企業を主体にして開催されました。

来年度はさらに期待できるものと思われま。卒業生が新しくある企業、会社に就職し、いわゆる前例ができませんとこのルートは後輩にとり大変貴重なものになります。

次に誇り、プライドについてです。卒業生には、歴史と伝統のある弘前学院大学に在学した

た。

明治三年(一八七〇)津軽藩では藩中の前途有望な俊秀六十

余人を選び、藩費をもって内地留学のため横浜、長崎、長州など先遣各地へ派遣した。これは

新時代に対応して英語や洋学を学ばせるためであり、当時中央政府に権勢を誇った薩摩・長州など藩の国情視察も目的であった。こうして本多は長州に派遣

されることになった。しかし本多にはこのとき海外遊学の雄志が強くあり、英語学習のために行き先を変更して横浜に赴いたのであった。

ことに堂々たる誇りを持って欲しいと思えます。人間形成の上でも知識や技能習得の上でも、良質な教育を受けたということに自信を持って欲しい。企業・会社・専門性を生かせる場に就職したとき、あるいはその上の教育を目指したいと思うとき、あるいは、さまざまなライセン



学位記授与式

す。青森力というのもありました。たとえば「鈍感」ではダメで、「鈍感力」、「力」が付くと、きちんと物事を把握しつ

「弘学力」はこの歴史と伝統を兼ね備えた環境の中で皆さんには自然と身につけております。そのことが自信、誇りとなって表現されるわけです。どうぞ、この「弘学力」を活用して前向きに進んでください。そして、社会においてさらなる専門知識などが必要なきは、どうぞ再びわれわれの門をたたいてください。きつと開かれ、諸君の要望に応えることができるでしょう。

先日の日本経済新聞に、「新入さん、ここに気をつけて」というのがありました。これから就職する理想の新人像を会社の先輩に挙げてもらった記事で、その「気を付けて」の第一位が「挨拶がきちんとできない」、二位が「メモを取らず、同じことを何度も聞く」、三位が「敬語が使えない」、続いて「雑用を率先してやろうとしない」と続きます。ここで、披露するべきことではないかも知れませんが、どうぞ、皆さんの耳にとどめおいてください。

私が弘前学院大学の学長として許された年に皆さんは入学しました。そのときの新入生の一泊研修にも参加しました。そこで、私は皆さんに「オ、ア、シ、ス」、をお願いしました。オアシスは砂漠の緑地のことですね。さびしい生活を慰(なぐさ)める、心にゆとりを持たせる、という意味でもあります。その「オ」は、おはよう、「シ」は、失礼しました、で、「ス」は、すみません、あるいは、スマイルです。いまさらというわけではありませんが、なかなか良い標語です。常日頃、このような態度を養ってください。また、「整理、整頓、清潔、清掃、躰」の頭文字を取った5Sについても話しました。会社や企業で働く労働者の健康管理を担当する産業医をはじめとし、職場の管理者が強く訴える標語であります。皆さんの卒業式と入学式の時と同じことを述べました。これもなかなかゴロがよい標語だと思っ

来日した、サミュエル・ロビンズ・ブラウン(一八一〇—一八〇一)と一八六一(文久元)ブラウンの要請に応じて来日した若き宣教師ジェームズ・バラ(一八三一—一九二〇)たちのもど英語・自然科学・文学・歴史さらに神学の教授も受けただのである。特に、バラの火のような熱誠とブラウンの高潔な人格の感化は、やがてその門下から明治キリスト教の逸材を輩出することになった。本多庸一、植村正久、井深梶之助、押川正義、山本秀雄、熊野雄七、奥野昌綱など、いわゆる横浜バンドの人たちである。

において本多自身が「予等数人の青年は当初毫も基督教の信者たるべき意なく、唯英語学修のみのために」バラ塾に学んだと述べている。しかし、他の初期キリスト教指導者の多くの場合と同様に、はからずもキリスト教との出会いを経験するのであった。しかし、「何にこの赤髻奴、今に見ると切歯扼腕」しながら、また「悲憤慷慨している僕らよりは、どうしてもバラのほうはずっと幾度も高いやうだ」と感じながら、他の多くの英学修業者達同様、新しい文明開化の指導精神を求めて、ひたすら英語学習に打ち込んでいたのであった。

明治四年(一八七一)薩摩藩令が断行された。これにより藩費留学生は学費が途絶え、帰郷のやむなきにいたり本多も同年の冬弘前に引き上げることになる。帰郷してみると、旧主家は今や没落した。家族は土族帰農令を受け弘前北東六キロの藤崎町に住んでいた。北国の冬空は重く暗い。人事頼みがたく、時勢の推移、制度の変遷を目前に見て感慨無量をかみしめたことだろう。本多はこの間の心境を次のように語っている。「このような境遇は私を非常に謙虚にさせました。」そして罪深き人間の本当の姿を知ろうという気を起こさせたのであります。そ

のとき不思議にもかつて私がまったく無関心に学んだ聖書の教えや教義の数々がいきいきと心に迫ってきました。私の道徳意識は鋭く力強くなり、理想は高揚しました。私が罪人であること、神と人に対する私の道徳的責任が極めて大きいこと、そして私が自分自身を救うことができないうことを痛感したのであります。しかし、私の周囲五〇〇マイル以内にはクリスチャンの友人は一人もいなかったのです。誰にも相談することはできませんでした。わたしは横浜へ急行しました。」(以下次号)

2007年度 理事長賞授与者 文学部 英語・英米文学科 中村誉美(田名部高校卒) 文学部 日本語・日本文学科 種市洋平(弘前工業高校卒) 社会福祉学部・社会福祉学科 葛西未絵(弘前工業高校卒)



阿保理事長より理事長賞授与

我々が地域総合文化研究所

地域総合文化研究所長
教授 笹森 建英

つがなく、2007年度の企画を終える事が出来ました。三回の講演会と、『地域学』の刊行です。客員研究員になりたいたと2名の学外研究者が申し出て、学長が承認しました。地域の労働運動と縄文時代の楽器について調査・研究するのが目的です。このように、研究所の活動が広がりを見せてく

看護学部のリカレント教育を開催して

看護学部教授
村田 千代

回を重ねて3回目の今年、これまでとは少し趣を変えて開催しました。これまでは、多くのテーマを主に講義形式で行っていましたが、過密なプログラムの反省、受講者の希望などにより、土曜日の午後2回に分けて講義・演習のほか、臨地実習にスポットをあてたシンポジウムを企画しました。

1回目は、十一月十日(土)、「看護研究に活かせるプレゼンテーションツールの使い方」三上聖治教授と、エビデンスに基づく看護技術「齋藤美紀子講師による講義と演習が行われました。当日は弘前市や黒石市、青森市などから約五十名が参加しました。受講後のアンケートには「両講義とも



先生方の研究紹介①

大学院教授 野口 伏名

国会開設運動の指導者笹森要蔵

私は今、津軽の知られざる国会開設運動の指導者笹森要蔵の研究に取り組んでいます。「知られざる」と言うより「忘れられた」と言う方が、より適切であるかも知れません。何故なら国会開設運動と言うと、津軽では、すくさま青森県の政界を代表して、太政官に国会開設の請願をした本多庸一や今宗蔵だけを思い浮かべて高く評価しているからです。しかしながら、本多や今の国会開設の請願は、明治十三年二月七日の国会開設東奥義塾集會において、同会集議長笹森要蔵が「議長の特見を以て本多庸一今宗蔵の二氏」を書記に撰定していなければ、本多庸一や今宗蔵の太政官への国会開設の請願は、国会開設の請願そのものが実現を見ないか、東北の国会開設運動の中心的活動にはならな

かったかも知れないからです。その意味で旧津軽弘前藩士笹森要蔵は、青森県の明治十三年の国会開設運動の熱心な推進メンバーであったのです。明治十三年頃の青森県内には、士族層の経済的精神的零落が原因となつて、東奥義塾関係者を中心とする国会開設運動と、土族授産をめざす動きなどの二つの政治的流れが形成されています。このうち笹森要蔵は、旧慣にこだわらない有能な指導者として、青森県内の大きな政治的潮流である国会開設運動に共鳴し参画するのです。笹森要蔵が国会開設の東奥義塾集議長として国会の開設を熱心に推進した最も大きな理由は、「国会ヲ開キテ立法権ヲ人民ニ与フル」ことによつて、国会の「議員ハ、投票公撰ノ上総代人トシテ国工差出ス者ナ

保健・医療・福祉と方言

—本学の取り組みと意見交換会報告—

津軽は、方言を使ってコミュニケーションをする方が、人間関係がうまく築ける社会である。津軽には津軽の生活にあつた津軽のことばがある。けれど「方言主流社会」と呼ばれる津軽でさえ交通の発達やテレビ・教育の影響などがあり、使われないことばが増えてきている。特に医療や福祉の現場では、ことばがわからないという問題がある。

その津軽にある本学は、文学部・社会福祉学部・看護学部を要する大学であり、現在、キリスト教主義教育に基づき、個人が設けられていた。階段も洋風だった。

私はこの家をとて素敵だと感じたのだが、太宰はそんなこととは思っていなかったと思う。津島家に六男として生まれた彼が存在は、この家ではとても小さく弱かったに違いない。それでも今ではこうして彼の生まれながらの家として有名になつているとは皮肉な話だと思ふ。

今回の文学散歩は青森の文化を知らない私にとって、とても有意義だった。今回は企画する側としてよいものにしたと思う。



移動後、最後と成る見学地は「斜陽館」だった。外観は塀に囲まれた大きな屋敷、という認識だった。中に入ると広い土間があった。話によると、ここで百姓たちの作った米が

1月10日、日本文学部の卒業生(1981年度)である相澤昌子さんより、自筆の書「花林橋」が寄贈された。本学在学中は書道部に所属し、現在弘前市で弘玄書道会会員として活躍されている。

寄贈された書は、佐々木萬芳さんの俳句「百年の幹ほこぼこ」と花林橋」を、力強い字体と大胆な構図で表現されており、第7回公募書道展で一般公募の最高賞を獲得したものである。寄贈のきっかけは、昨年ギャラリーつばた文庫で開かれた弘前学院卒業生作品展で阿保理事長がこの作品を目にしたことか



ら実現したもので、母校に作品を贈ることが出来たと相澤さんの喜びのコメントもいただき、書を頂いた阿保理事長は、素晴らしい作品なので、多くの在学

もに、文学という観点から津軽の「言わない文化(ゼロ記号の方言)」について発表された。この意見交換会については、開催前から新聞・テレビなどの取材が相次ぎ、社会的関心が高い問題であることがわかった。研究グループのメンバーでもある今村自身は、方言に込められた患者・利用者の皆さんの思いをしっかりと受け止めるにはどのようなにすればよいのかという地域の問題に対する研究の意義を再確認するとともに、地域に開かれた大学としての本学の研究が、期待されていることが明らかになった試みであったと認識している。



卒業生より自筆の書が寄贈される

根気強さ

文学部英語・英米文学科卒
中村 誉美



私の大学生活4年間は、一言で言うと「根気強さ」が養われたものだったなあ、と今振り返ってみて、そう感じました。今までの私は、なぜ物事を最後までやり遂げることに意義があるのかという疑問を持ち続けていたため、ひたむきに頑張ることなんて無駄なことだと思っていました。そんな私は、この大学に入学して、まず授業や課題の多さに驚きました。「大学って、もっと楽なところじゃないか?」と、日々不満を口にして、勉強するつらさから逃

大学生生活4年分

文学部日本語・日本文学科卒
種市 洋平



茶道や武道において、「守破離」という言葉がある。「守」は先輩の教えを忠実に守る事、「破」は「守」からさらに洗練させて自己の個性を創造する事、「離」は「破」で創り出した個性から自分独自の道を完成させる事を意味するという。私にとって大学生活とは、「守」の域を出なかった。それは

自分の中に確かめることができました。「つらいから諦める」ではなくて、「つらい時こそ、もっともつと頑張る」、自分の可能性を広げることが一番大事だということ、4年間様々な経験を通して学ぶことができました。これから先、また「もうつらいから逃げ出したい」と思うことが何度もあると思います。ですが、そんな時、大学生活で自分が様々なことを根気強く続けてこられたことを思い出して、「あの時に諦めないで我慢して頑張っておけばよかった」と後悔しないように、人生を歩んでいきたいと思えます。自分にこのような大切なことを気付かせてくれた学校や、そこに4年間ずっと通わせてくれた両親には本当に心の底から感謝しています。本当に4年間、ありがとうございました。

だと言え、履歴書における大きな扱いは裏腹に、人生においては「守」も卒業出来ずにいる成長途中も良いところである。大学生活の4年間で成長は出来た。ただそれを人生全体に考えるとどれほど意味があったのか、どれほど意味があったのか。大学4年間の、少々以上に怠り者であった私には後悔が残る。もしも過日を手に入れられるなら、今度は在学中に「破」の真似事くらいは出来たのではないだろうか、卒業を迎える今思う。それでも確かに成長し、日々は楽しかったからと納得は出来ない。かつてを美化して受け入れるには私は若過ぎる。弘前学院大学の4年間で私の

大学生生活を終えて

社会福祉学部社会福祉学科卒
葛西 未絵



新しい生活に、期待と不安でいっぱいだった入学式。そして今、新たに始まる生活に対し、同じような心境で日々過ごしています。祖母の事がきっかけで、社会福祉について学び、携わってきたいと思いい、弘前学院大学へ入学して早4年。振り返ってみると、大学生活は本当にあっという間で、多かったです。とても充実し、多くの

祝卒業

二年間をふり返って

大学院社会福祉学専攻卒
浅利 英伸



本院の特色は、社会福祉制度、福祉行政のみならず、それらの受益者である福祉利用者、利用者サイドから福祉問題を把握し、その成果は、自分の未熟を知った事、過日への後悔を得た事、「守」の段階である事を自覚した事、「破」の段階を考えた事、そして、将来にかなければ価値を知らない四年分の確かな成長である。

の事を得た4年間で。講義、福祉施設での実習やボランティアを通して、私は、人が生活していくには、家庭だけでなく、その他に人々との交流の場や「居場所」がある大切さを強く感じるようになりました。友達を作る場、役割を持つ場、生きがいを持つ場、様々な場面で多くの人々とふれあい、その中で生き生きと活動している方々を見て、人が生活し生きていくには、支援だけでなく、自らが必要とされる場所や人間関係が必要ではないかと思えました。そして、大学生活の中で弘前学院大学は私自身にとって、とても大切な居場所だったと思えます。ここでは、多くの友人を得ることができました。普段の生活の中、また特に4年次では、就職活動や国家試験など多くの場面で

壁にぶつかったり、挫けそうになったりもしました。しかし、家族や先生方に支えられ、また何より、友人たちが夢に向かって努力している姿を目にし、自分も頑張らねばという励みを受け、乗り越えることができました。また、これら乗り越えてきたことが、自信にもなりました。内心、これから社会に出て行くということに関しては、不安が尽きません。しかし大学での4年間、苦労したこと以上に楽しかったことが多くあり、これからの自信を持って日々努力していきたいと思えます。ここで得た知識や技術を全て発揮し、またこれからも多くのことを学び、利用者の方の思いに寄り添ったケアができる社会福祉士になりたいと思えます。



2007年度卒業記念パーティー (2008.3.22)



卒業生からのメッセージ

日々の積み重ねについて

2000年3月卒 日本文学科 堀内 彩子



母校に通う皆さんはどのような日々をお過ごしでしょうか? 私は大学を卒業し、8年目を迎えました。現在は母校で取得した資格を活かし、学芸員として三沢市先人記念館に勤務しています。大学は今までの団体行動とは異なり、自分の意志で様々な選択が可能となり、交流も広がります。と同時に、更に自己責任が求められる、将来へのより具体的な方向性を定めていく必要性も生じます。私は高校時代、進みたい将来の方向性が定まらず、焦燥感を抱いたまま大学へと進学しました。大学へ進めば何かが見つかるとは思いません。しかし、その「将来」の模索はいつしか学芸員の道へ進みたいという願いとなり、現在へとつながりました。しかし道のりは決して順風満帆とは言えませんでした。今ではその時の葛藤や苦悩があったからこそ、家族や人の有り難さや大切さ、仕事の意義、就職することはゴールではなく、始まりであるということ等、様々なことを学ぶことができたのだと実感しています。人によって同じ人生はなく、進む道も様々。重要なのは、日々を自分なりに大切に過ごし、向き合うことであると思えます。経験することに無駄などなく、そこから何かが生まれ、次へとつながっていくのだと思います。一人一人が貴重な存在であり、その個性や各々の分野が発揮され、社会が形成されている。そして個人を尊重することの大切さは大学の少人数制の姿勢より培うことのできる貴重な財産です。皆さんが日々元気に過ごされ、様々な出会いと自分の意志で選択したことにより二度と戻らない学生生活が大切な財産となりますよう願っております。また今回、執筆の機会をくださいました母に心より感謝とお礼を申し上げます。